

日本の外国人移住者の言語環境と言語管理  
——言語バイオグラフィーの通時的・共時的  
語りの分析から——

高 民 定

Language Environment and Language  
Management of Immigrants in Japan:  
An Analysis of Diachronic and Synchronic  
Narratives in their Language Biography  
Minjeong Ko

The aim of this study is to examine problems of language awareness and language acquisition among immigrants due to the change of language environment in their home country and in the host country. The data was collected through a language biography investigation, from which synchronic and diachronic narratives in the immigrants' reports were abstracted for analysis. On the basis of this data, awareness regarding language use and language learning was further discussed so as to find out possible tendency of changes of language environment. The findings suggest that as a clue for the understanding of immigrants' language acquisition problem, migrants' language habits and the diachronic perspective of their language biography should be taken into consideration.

キーワード：外国人移住者、言語環境、日本語使用意識、言語習慣、  
言語バイオグラフィー

1. はじめに

社会のグローバル化という大きな流れのなか、世界を移動する人々も急激に増加しており、国連の最近の調査によると世界人口の約3.2%が移動人口に当たるとされている<sup>1)</sup>。このような人口移動は単なる空間的な移動

を意味するだけではなく、言語間の移動や言語環境の多様化をももたらし  
ており、それに伴う個人の言語使用意識の変化も予想される。日本に目を  
向けると、日本の外国人移住者<sup>2)</sup>数も年々増加しており、滞在の長期化も  
進んでいる<sup>3)</sup>。こうした社会状況の変化のなか、グローバリゼーションの  
中を移動する日本の外国人移住者の言語環境と日本語使用の現状はどのよ  
うになっているだろうか。とくに近年ニューカマーと呼ばれる外国人移住  
者の言語的調整は、従来のような移民コミュニティをベースとするより個  
別に行われることも多く、流動的で安定しない特徴をもつと言われている  
(村岡、2016)。また近年移動と接触に伴う多言語使用者が増えている状況  
のなか、日本のような日本語の単言語使用を中心とする社会における外  
国人移住者の言語使用と習得に対する意識は一様ではなく、当事者による  
様々な言語的調整が行われていると予想される。とくに、多言語社会から  
移住してきた多言語使用者のなかには、日本語を第3、第4言語として習  
得し使用する人も少なくなく、そういう背景をもつ人たちの言語意識は第  
2言語として日本語を習得して使用する人たちの特徴と異なる可能性があ  
ると考えられる。またこうした移住者達の日本における言語使用の実態と  
日本語習得に対する意識をとらえるためには、彼らの移住前の言語環境と  
移住先での言語環境の変容に注目した考察が必要であろう。

本稿では外国人移住者の言語環境から言語使用、言語意識の変容のあら  
ましを半構造化インタビューにより調べる言語バイオグラフィーのデータ  
を基に、外国人移住者の日本語を含む言語使用意識と日本語の習得に対す  
る評価を通時的、また共時的な視点から分析・考察し、彼らの日本での接  
触場面に向かう言語管理(村岡、2010)の諸相を明らかにする。またそれ  
により、異なる言語環境に属する日本の外国人移住者の日本語使用意識と習  
得問題の特徴、またその意識の変容の方向性を明らかにすることを試みる。

## 2. 日本の外国人移住者の研究アプローチと接触場面の参加をめぐる言語管理

ネウストプニー(1997)は接触場面での言語使用を語るとき、コミュニ  
ティというものがあるのがその枠組みになるとしており、コミュニティ言語につい

ては二つの異なった研究アプローチがとられるとしている。一つはコミュニティ言語そのものとそれがどのように変わっているかに焦点を当てるものである。もう一つは実際のインターアクションに参加する個々の構成員とコミュニティとの関係に焦点を当てるものである。ネウストプニーは、前者については「コミュニティ言語アプローチ」と呼び、これには従来の言語保持、言語変化の問題、継承語問題、バイリンガル教育などの研究が当たるとしている。後者については「接触場面アプローチ」と呼び、コミュニティの構成員がどのように関係作りをし、コミュニケーションをしているか、またそこではどのようなコミュニケーション問題が起こっているかに注目するアプローチであるとしている。さらに後者の分析においてはコミュニティ言語の問題を言語レベルだけではなく、社会や文化などの複数のレベルとストラテジーの選択との関わりからとらえる言語管理理論 (Neustupný, 1987; ネウストプニー, 1995) が有効であることも指摘している。本稿の日本の外国人移住者のコミュニティ言語による問題をとらえるためには、後者の「接触場面のアプローチ」のほうが有効であることは言うまでもない。

さらに、外国人移住者が接触場面にどのように参加し、どのように接触場面をとらえ、そこでの言語使用をどのように評価しているのかについて、村岡 (2010) ではどのように参加するかを「接触場面における管理」(language management within contact situation) とし、またどのようにとらえているかについては、「接触場面向かう管理」(language management towards contact situation) と名付け、接触場面をめぐる参加者の言語管理のレベルを分けている。とくに、接触場面向かう管理については、「社会言語学などで扱われてきた言語態度や言語意識と類似するが、それらが言語イメージ等を含んだ静的、固定的であるのに対し、接触場面向かう管理は習慣化された『言語行動に対する行動』」を指すとしている (村岡, 2010, p. 49)。またそれぞれの調査方法においては、接触場面における言語管理は主に接触場面のディスコースを収集し、参加者の言語行動時の意識を調べることで接触場面参加者の言語問題をとらえようとしているのに対し、接触場面向かう言語管理は、言語バイオグラフィーなどの調査を通し、

参加者の言語使用意識や態度、言語習得に対する通時的管理をとらえようとしている。とくに、接触場面に向かう言語管理は、外国人移住者の接触場面における言語使用意識やインターアクションの評価と密接に関係しており、近年様々な調査・研究がなされている。たとえば、類型論的なアプローチから習慣化された言語管理の記述を試みた村岡(2010)や、個人の言語レパートリーの変容は、話者がそれまで参加してきた様々な接触場面で生じた言語管理の軌道(trajec-tory)であることを指摘した Muraoka, Fan & Ko(2013)の研究、香港人とフィリピン出身の家政婦との英語の第三者接触場面に向かう管理を分析した Fan(2015)、韓国人の接触場面に向かう習慣化された言語管理を明らかにした今(2012)などの研究がある。またこうした接触場面に向かう言語管理の存在は、日本語教育の視点から外国人移住者の言語使用意識をとりあげている研究からもうかがうことができる。たとえば、野山(2013)では、定住外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態を横断的に考察し、日系ブラジル人の日本語とポルトガル語の2言語使用者の場合、場面に応じて自分が使える言語の蓄積を増やしていることを指摘している。また、実際の会話においては、自分の発話に自信がないことから、言い切らないままの文で終わることが多かったり、特定のスタイルを習慣的に使用するという特徴が見られたことも明らかにしている。このような接触場面の言語管理と日本語教育の一連の研究からは、日本の外国人移住者の日本語を含む言語使用や習得問題を考えるには、彼らがどのような言語習慣、すなわち言語使用パターンを持ち、それが実際の言語使用場面においてはどのように反映されているかを調べることの重要性が示唆された。

そこで本研究は外国人移住者の言語環境の実態をとらえながら、日本語使用意識と習得問題を当事者の行う言語管理の観点から考察することを研究課題とする。そのためにもまず、日本の外国人移住者をめぐる言語環境を出身地域の言語習得と現在の言語使用の状況をもとに、いくつかの言語使用グループに分ける(高・村岡2015)。その上で、各言語使用グループに属する人たちの現在の日本語使用を含む言語使用意識とそのような意識に至るまでの言語管理の軌道を、言語バイオグラフィーの共時的と通時的な語

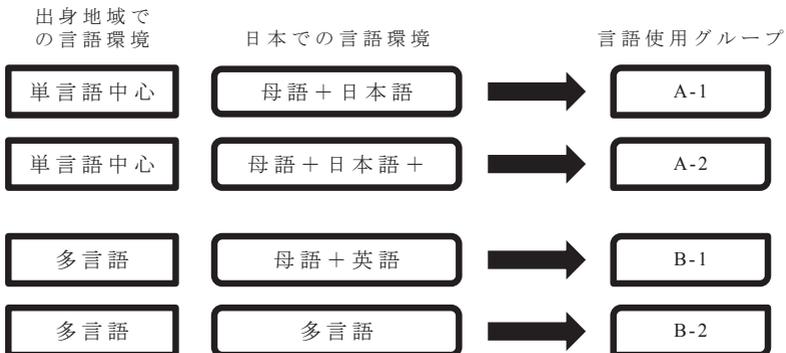
りから分析・考察する。

### 3. 日本の外国人移住者の言語環境と言語使用グループの分類

本研究では、調査協力者の言語バイオグラフィーにより調べられた言語環境の調査結果をもとに、来日前および来日後の言語使用がそれぞれ単言語、2言語、多言語のどれに当たるかという観点から言語使用環境の変化のパターンを次の四つに分類した。

- (1) 出身地域では単言語中心だが、日本では母語と日本語の2言語を主として使用する言語使用グループ、本稿では便宜上「A-1」とする。
  - (2) 出身地域では単言語中心だが、日本では母語と日本語に加え、英語などの多言語を主として使用する言語使用グループ、本稿では便宜上「A-2」とする。
  - (3) 出身地域では多言語使用であるが、日本では主として母語と英語の2言語のみを使用する言語使用グループ、本稿では便宜上「B-1」とする。
  - (4) 出身地域でも多言語使用で、日本でも主として母語と英語、日本語の多言語を使用する言語使用グループ、本稿では便宜上「B-2」とする。
- また、上記の四つの分類を図で表してみると、次の図1の通りである。

図1 言語環境と言語使用グループの分類



もちろん、言語使用に与える要因には上記であげている出身地域や現在の言語環境のほかに滞在期間や来日目的など様々な要素が関わっているということは言うまでもない。なお、本稿における言語環境というのは、性別や年齢、ネットワークといった、いわゆる社会言語学で言われる一般的な属性という意味より、外国人移住者一人一人が経験し、管理してきたものとしての言語環境を意味する。

#### 4. 調査方法

##### 4.1. 本研究における調査協力者

本調査では10名の調査協力者に言語バイオグラフィーの調査を行っており、調査協力者の出身地域、職業、母語などのプロフィールについては表1のとおりである。

表1 調査協力者のプロフィール

	調査協力者	出身地域	来日	職業	年齢	性別	母語	調査時期
A-1	R1CN	長春	2013	大学院生	20代	F	中国語	2015.1
	R2MN	ウランバートル	2011	大学院生	40代	F	モンゴル語	2015.1
A-2	R3NP	ルンビニ	2007	大学院生	30代	M	ネパール語	2015.11
	R4CN	北京	2014	短期滞在	30代	F	中国語	2015.7
B-2	R5IDN	ジャカルタ	2009	大学院生	20代	M	インドネシア語	2015.8
	R6PH	マニラ	2014	就学生	20代	F	タガログ語	2015.9
	R7AU	シドニー(中国)	2013	主婦	30代	F	中国語	2015.7
	R8SRI	コロンボ	2013	学部生	20代	F	シンハラ語	2015.11
	R9TH	チェンマイ	2014	短期留学生	20代	M	タイ語	2015.7
	R10IND	ニューデリー	2013	大学院生	20代	F	ヒンディー語	2015.8

上記の調査協力者の言語使用グループの分類は、ランダムに依頼された調査協力者の言語バイオグラフィーの調査の結果を基にして作成したものである。その結果、A-1とA-2の言語使用グループには、各々2名の調査協者が、B-2の言語使用グループには合計6名の調査協者が該当することが分かった。B-1の言語使用グループに関しては、存在可能な言語使用グループであるが、今回は主として日本語の使用を分析することを目的としているため、今回は取り上げないことにする。

#### 4.2. 言語バイオグラフィー・インタビューと本研究の分析の枠組み

言語バイオグラフィー・インタビューは半構造化インタビューにより、調査協力者の生い立ちから言語形成、言語習得、言語使用についてのあらましを記述する方法である(Nekvapil, 2003; 今, 2012など)。つまり、実際の場面ではなく、調査協力者の言語生活の社会的・通時的な文脈が考慮され、現在の言語使用の来歴をさぐる方法である。また、Denzin (1989)は言語バイオグラフィー・インタビューでは、協力者により語られるナラティブから、①事実レベル、②主観的レベル、③テキスト・レベルの三つのデータを収集し、分析に扱うことができるとしている。

- ① 事実レベル (what “things” were like /how events occurred)
- ② 主観的レベル (how “things” were experienced by the respondents)
- ③ テキスト・レベル (how “things” and events are narrated by the respondents)

つまり、事実レベルは語り手の意図は含まれない実際の出来事の語りで、例えば、社会的背景、個人の状況などの情報がそれに当たる。主観的レベルは経験した出来事についての意識や評価の通時的語りと、現在の意識と評価に関する共時的語りを指している。テキスト・レベルはインタビューでどの出来事を語るか、また語らないかで、例えば、自発的に語ったか、質問による語りか、詳しく語るか大まかに語るかのことを指している。

本研究における出身地域と現在の言語環境は、事実レベルとして、社会や個人の状況を表しており、主観的レベルでは、言語習得と使用に関する

過去の評価や調整に関する通時的語りと、現在の日本語使用を含む言語使用に関する意識と評価の共時的語りが当てはまる。またそれを自発的に語ったか非自発的に語ったかはテキスト・レベルとして扱うことができると考える。以下の表2と表3は本研究における分析の枠組みと実際の分析の例である。

表2 本研究における言語バイオグラフィー調査を使った分析の枠組み

個人プロフィール と言語環境	出身地域と現在の言語環境	
事実レベル	・社会的状況・個人の情報	
主観的レベル	【通時的語り】	・言語習得・使用に関する過去の意識や調整・ 評価に関する語り
	【共時的語り】	・現在の日本語使用意識や習得に関する評価の 語り
テキスト・レベル	自発的語りか、非自発的語りか	

表3 分析例：モンゴル出身のR2MNの場合

個人プロ フィール と言語環 境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モンゴル出身、40代後半、F</li> <li>・2011年来日、現在大学院生</li> <li>・出身地域の言語使用：母語のモンゴル語中心</li> <li>・日本での言語使用：モンゴル語と日本語の2言語中心</li> </ul>	
事実レベ ル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モンゴルは1990年まで社会主義体制であったため、社会や教育などにおいてロシアからの影響が大きかった。</li> <li>・子供の時からロシア語のテレビや絵本を見たり、ロシア語に触れる機会が多かった。</li> <li>・中学校と高校でもロシア語が第二外国語として指定され、学んでいた。</li> <li>・高校卒業後は、専門学校と社会経験をした後、23才になって私立大学の日本語学科に進学する。大学卒業後は来日前まで私立大学で10年間日本語を教える。</li> </ul>	
主観的レ ベル	【通時的語 り】	<ul style="list-style-type: none"> <li>【子供の時】</li> <li>・子供の時から外国語が好きだった。</li> <li>【中・高校の時】</li> <li>・学校での外国語はロシア語しかなかったので、<u>ロシア</u></li> </ul>

日本の外国人移住者の言語環境と言語管理

		<p>語が好きだった。</p> <p><b>【大学の時】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の勉強はとても面白く、新鮮だった。</li> <li>・日本語を勉強したいという意識がとても強かった。</li> <li>・日本語は難しかった。とくに、一番弱いのは漢字だった。</li> <li>・非漢字圏のモンゴル人にとって漢字の習得は難しく、何度も書きながら覚えていた。</li> </ul>
	<b>【共時的語り】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語は今でもわからないところがある。</li> <li>・とくに漢字が弱く、日本語が自然にインプットできないときがある。</li> <li>・日本語は今も難しく、一番弱いのは漢字。</li> <li>・最近では、ゼミの時の感想を言ったり、質問したりするときのアカデミックな日本語の使用が難しい。</li> <li>・アルバイト先の同じモンゴル出身の人が使う若者の言葉の日本語の使用を否定的に評価する。</li> </ul>
テキスト・レベル	<b>【自発的語り】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の時の言葉の勉強について</li> <li>・大学の時の日本語の勉強について</li> <li>・漢字習得の難しさについて</li> </ul>
	<b>【質問による語り】</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭での言語使用について</li> <li>・漢字以外の日本語の使用の問題について</li> </ul>

表3のR2MNはモンゴル出身の来日5年目の留学生で、出身地域では主として母語のモンゴル語の単言語話者で、日本では日本語とモンゴル語を主として使用している。R2MNが生まれて、大学生になる1990年までモンゴルは社会主義の体制であったため、社会全般においてロシアからの影響が大きかったという。そのため、子供のときからロシア語のテレビや絵本を見たりしてロシア語に触れる機会が多く、また学校でも中学校から高校までロシア語を第二外国語として学んでいたという。R2MNは出身地域での外国語の習得に対する意識を聞く質問に対し、「子供の時からすごい外国語好きでした。外国語というかロシア語しかなかったので、ロシア語好きでした。(後略)。」と語っており、外国語習得の意識が子供の時から高かったことがうかがえる。さらに、R2MNは大学に入り、日本語を初めて習ったとしているが、その時の意識について、「日本語の勉強はすご

い面白かったです。なんていうか新鮮というか、ほんとに日本語を勉強したいという心があったので(後略)。」また、「日本語は難しかったんですよ。一番弱いのは漢字です。非漢字の国だからモンゴルは。全部書いていたんですよ漢字は。全部書いて、書いて覚えてました。」と話している。これらの主観的レベルにおける通時的語りからは R2MN が子供の時から外国語学習への意識が高かったことをはじめ、大学に入ってから学び始めた日本語に対しても習得意識が高く、特に漢字は日本語の習得において一番の問題となっていたことが読み取れる。また、そこで自分なりの学習ストラテジー(ひたすら書いて覚える)を使いながら漢字の習得問題を解決しようとしていたこと、いわゆる R2MN の一連の言語管理の様子がうかがえる。こうした R2MN の通時的語りから見られる日本語の習得に対する管理は、現在の日本語使用意識にもつながっていることが R2MN の共時的語りからうかがえる。R2MN は現在の日本語の使用において、「日本語は今でも分からないところとか、漢字は弱い人間ですよ。だから、自由に日本語を受け入れて、すらっとやっているわけではないですね。わからないところがあったり。」と話しているが、このような共時的語りからは R2MN にとって漢字の習得は今でも日本語の問題として強く認識されていることを示唆していると思われる。さらに、R2MN は漢字問題のほかにも、最近の日本語習得について、「特に一番うまくいかないのは、授業のとき演習のときは、感想言ったり質問したりするときは、議論アカデミックなそういう言葉はほんとに難しいんですよ。」と話しており、とくに、アカデミックな日本語の習得について意識が強いことがうかがえる。また他の外国人の日本語の使用の影響を受けたことがあるかというインタビューの質問に対しては、影響を受けたくないと答えており、アルバイト先での同国人の日本語の使用を、とくに若者言葉としての日本語使用を否定的に評価したことをエピソードとして語っている。このような報告の例から R2MN の日本語の習得と使用に対する意識は来日後も変わらず、高いままで維持されていると言えよう。

本稿では、以上の表2と表3のような言語バイオグラフィー調査に基づ

く分析の枠組みを使い、三つの言語使用グループの分析の結果をまとめる。紙面の関係上、すべての調査協力者の分析の結果を示すことはできず、各言語使用グループのケーススタディーとして、A-1のグループでは中国出身者の事例を、A-2のグループではネパール出身者の事例を、B-2のグループではインドネシア出身者の事例を各々取り上げることとする。3人は調査の時点で全員大学院に在籍している留学生であり、滞在期間も全員3年以上の長期滞在者となっている。分析の記述に当たっては、言語バイオグラフィーの事実レベルの語りからまず(1)調査協力者のプロフィールと言語環境についてまとめた後、日本語使用意識と習得の評価に関する主観的な語りを中心に調査協力者の(2)接触場面向かう言語管理の特徴を探る。最後に(2)の結果を基に調査協力者の(3)日本語の習得に対する現在の意識と変化の方向性を検討する。

## 5. 分析結果

### 5.1. 言語バイオグラフィーに見られる A-1 の日本語使用意識と言語管理 (R1CN の場合)

表 4 R1CN の言語環境と言語バイオグラフィーの語りの分析例

個人プロフィールと言語環境	・中国(漢民族)、長春出身、20代、F ・2013年に来日、現在大学院生 ・出身地域での言語使用：母語の中国語の単言語中心 ・日本での言語使用：中国語と日本語の2言語中心
事実レベル	・小中校で漢民族の学校に通い、小学校6年生から外国語として英語を学ぶ。 ・高校は外国語学校の日本語科に入り、3年間日本語を専門として学ぶ。 ・大学も日本語学科、卒業後は通訳の仕事で1年やり、その後来日する。
主観的レベル	【通時的語り】 ・小学校の高学年のときから日本のアニメに興味を持ち、 <u>アニメ</u> を見ながら、日本語にも興味を持ち始めた。 ・高校では日本のアニメを見ていたので、違和感なく学べた。 ・大学生の時はアニメに出てくる <u>日本の声優さんのしゃべり</u> を

	<p>マネしながら、さらに上のレベルをめざし、勉強していた。</p> <p>・交換留学で日本に来た時から「日本人は日本語ができる外国人はほめながらも警戒心を持って見てしまう」と感じた。</p> <p>・研究生として再来日した時も日本語が完璧ではないほうが望まれると思っていたので、わざと日本語を下手に話すときと、そうではないときとで使い分けていた。</p>
	<p>【共時的語り】</p> <p>・最近の就職活動で感じたことに関する話題で、日本人は日本語がとても出来る外国人に対して警戒心があると、日本人の行動を留意する。</p> <p>・日本人の行動を否定的に評価しながらも、それに合わせ、わざと日本語を間違えるという調整をする。</p> <p>・ネイティブよりきれいな日本語を話したい。</p> <p>・アナウンサーや声優のような日本語を職業としている人たちの日本語に達したい。</p>
テキスト・レベル	<p>【自発的語り】</p> <p>・子供の時に日本のアニメが好きで、小さい時から日本語に触れていた話について</p> <p>・日本人の外国人の話す日本語の評価について</p>
	<p>【質問による語り】</p> <p>・日本語使用で困ったことについて</p> <p>・日本語習得の目標について</p>

### (1) R1CNのプロフィールと言語環境(事実レベルの語りから)

R1CNは中国(漢民族)の長春出身の20代の女性で、小学校6年生から外国語として英語を学び、子供の時から日本のアニメが好きで、高校は外国語学校に入り、3年間日本語を専攻した。また大学も日本語学科に入り、卒業後は通訳の仕事をして1年後日本に留学し、現在は(調査時)大学院の修士課程に在籍している。日本滞在歴は調査時で3年目となっている。R1CNはこれまでの言語習得と言語能力の自己評価について、第1言語は中国語(5レベル)で、第2言語が日本語(4レベル)、第3言語は英語(2レベル:話す、聞く)と報告している。

### (2) R1CNの日本語使用意識と言語管理(主観的なレベルの語りから)

#### ① R1CNの共時的語りに見られる日本語使用意識

RICN は最近の就職活動で感じたことに関する話題で、日本人は日本語がとても出来る外国人に対して警戒心があると、日本人の行動を留意したことを話しており、またそのときの相手の母語話者の行動を否定的に評価し、わざと言い間違えるという調整をしたことを報告している。以下の例 1 はそのときの実際の語りである。

〈例 1 RICN の共時的語りに見られる日本語使用意識の例〉

RICN: 面接のときですと、私が感じているんですけど日本人って日本語がとても出来る外国人に対して警戒心があるので、わざと言い間違えたりします。面接のときはなるべく良い日本語をしゃべろうとするんですけども、ときどき、わざと確信を持っていないときもあるので、「ハテナ(?)マーク」つきの会話文だったりとかにします。

② RICN の通時的語りに見られる言語管理

またこのような RICN の就職場面でやっていた調整に対する意識は、実は RICN が交換留学で来日した時からもっていたものであることが次の例 2 の語りから確認することができる。例 2 において、インタビュアー (以下 ER) は RICN の「日本語がとても出来る外国人に対して警戒心がある」という発言を受け、さらに、「どこでどういうふうに」と尋ねている。それに対し、RICN は「大学 2 年の交換留学の時から感じていた」と語っており、また「私自身、日本語をペラペラしゃべっているときよりもちょっと間違えた方が歓迎されるのがわかるので (笑)」と報告している。このような語りからは、上記の RICN の例 1 の調整は過去の自身の日本語の使用に対する評価の蓄積によるもの、すなわち通時的言語管理の結果であることがうかがえる。さらに RICN は、このようなわざと間違った日本語を話すという調整は研究生として再来日した時も続き、現在は下手な日本語をわざと話すときとそうではないときとで使い分けているという。とくに、大学のゼミのような場面では完璧ではないほうが日本人の学生達に受け入れられると感じているという報告も付け加えている。

〈例2 R1CNの通時的語りに見られる言語管理の例〉

ER: どこでどういうふうにな?

R1CN: 大学2年の交換留学から感じてました。日本語が出来る外国人に「すごいね」と言いながらも「こいつなんだ」みたいな。

ER: それは自分の経験ですか?

R1CN: そういった研究のコラムを読んだことがありますし、私自身、日本語をペラペラしゃべっているときよりもちょっと間違えた方が歓迎されるのがわかるので(笑)。例えば、「時系列」という単語を言います。その時に心の中は分かっているけれど「時間列?」と言い、「私はこの研究に関して時間列を例として挙げています」みたいな。相手から「あっ、時系列ね」みたいな温かい眼差しが来る。これに合わせて「すみません私の日本語良くなって」(笑)。

ER: 分かっているけれども敢えて間違えて、訂正してもらって。

R1CN: そう。この2年間特に多いので日本語のレベル下がりました(笑)。

### (3) R1CNの接触場面向かう言語管理からみる日本語習得意識

また、R1CNは、ERの正しい日本語の使用や習得についての質問に対し、次の例3のように「なるべくきれいな日本語を話すように心がけているんですけども、なかなか直らないイントネーションとか、勘違いしながら使っている日本語もあると思うので、その点に関してはまだまだだな」と自身の日本語の習得を評価している。また自分らしい日本語について話題になったときは「自分らしい日本語ですとだめな日本語になりますよね、そういう意識はほとんどないかも」と話しており、このような語りからはR1CNの日本語の規範意識が強いことがうかがえる。

〈例3 日本語習得意識の語りの例〉

R1CN: なるべくきれいな日本語を話すように心がけてはいるんですけども、なかなか直らないイントネーションとか、勘違いしながら使っている日本語もあると思うので、その点に関してはまだまだだなと。(中略)日本語を職業とする日本語レベルに達したい、自分らしい日本語ですとだめ

な日本語になりますよね。 そういう意識はほとんどないかも。

以上、RICN の語りの例から読み取れる日本語習得意識の特徴をまとめると、まず、日本語の規範意識が高いことがあげられる。具体的には、「きれいな日本語を使いたい」という発言や「自分らしい日本語ですと駄目な日本語になりますよね。」「他の外国人の日本語に影響されたくないで切り替えたい」という発言から読み取ることができる。さらに RICN は日本語習得に対する目標と意識も高く、実際「ネイティブになろうとは思わないけど、学習している身分としてはネイティブよりいい日本語を話したい」という発言や、「アナウンサー並み、強いて言えば声優並みの日本語を話したい。」「日本語を職業としている人たちの日本語レベルに達したい」というような発言からもうかがうことができ、日本語の習得に対する目標意識は滞り初期から長期になった現在でもほとんど変わらず、今後も同様に傾向が維持される可能性が示唆された。

## 5.2. 言語バイオグラフィーに見られる A-2 の日本語使用意識と言語管理 (R3NP の場合)

表 5 R3NP の言語環境と言語バイオグラフィーの語りの分析例

個人プロフィール と言語環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネパールのルンビニ出身、ネパール語母語話者、30代、M</li> <li>・2007年に来日し、現在大学院生</li> <li>・出身地域での言語使用：主としてネパール語</li> <li>・日本での言語使用：ネパール語と英語、日本語の多言語中心。特に英語は大学に入り、使う機会が増え、現在は日本語と英語使用は半々となっている。</li> </ul>
事実レベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校では英語、サンスクリット語を習う。</li> <li>・高校の時(現地では8学年)にインドに近い街に引っ越し、ヒンディー語話者と接する機会が多かった。</li> <li>・1996年に高校を卒業する頃にネパールで内戦が始まり、住んでいた町からまた離れ、首都のほうに移住する。</li> <li>・首都にはいろいろな民族がいたので、いろいろな言語を聞く機会が多かった。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校卒業後はネパールの大学に入り、経済学を学ぶ。この頃から海外への留学を真剣に考え始める。</li> <li>・2007年に来日し、1年半くらい日本語学校で日本語を学び、その後日本の大学に学部生として入学する。</li> </ul>
主観的レベル	【通時的語り】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語の勉強は苦手だった。</li> <li>・インドに近い町に引っ越したときは、ヒンディー語も英語も少しは分かるようになったが、主に話す言語はネパール語だった。</li> <li>・大学在学中に日本語を始めて習った時は文字が難しく、<u>毎日漢字が生まれてくるという印象を受けた。</u></li> <li>・日本で日本語学校に通った時は、周りの中国人と韓国人はみんなうまくなっていたが、<u>自分はなかなか昇級できずにいた。</u>でも、それは言語学的に中国語と韓国語のほうが日本語に近いからなので、仕方がないと思った。</li> <li>・大学では日本語の授業より英語の授業を多く取り、英語を使う機会も増え、<u>日本語より英語のほうが上達していた。</u></li> <li>・大学に入り、自分の日本語ではもうダメだと思った。</li> </ul>
	【共時的語り】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネイティブの日本語に近づきたい意識はまったく持っていない。</li> <li>・学業においては日本語より英語のほうをもっと使用している。</li> <li>・日本語は普通の日常会話さえできればよく、<u>大事なのは言葉の形式ではなく、中身で、中身をもっと身につけることが大事。</u></li> <li>・<u>自分らしい日本語でいいと思っている。</u></li> <li>・自分の日本語力を助けてくれる<u>中国人の留学生ネットワークを大事にする。</u></li> </ul>
テキスト・レベル	【自発的語り】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネパールでの外国語の接触について</li> <li>・大学の時の英語学習について</li> </ul>
	【質問による語り】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語使用で困ったことについて</li> <li>・日本語習得の目標について</li> </ul>

### (1) R3NPのプロフィールと個人の言語環境(事実レベルの語りから)

R3NPはネパール出身のネパール語母語話者で、30代の男性である。出身地域での使用言語は、ネパール語で小・中学校では英語とサンスクリット語を習い、インドに近い街に住んでいたこともあり、また国内を移住しながら暮らしていたため、いろいろな言語話者と接する機会が多かったという。日本には8年前に来日し、日本語学校と大学の学部に通い、現在も

留学生として博士課程に在籍している。英語は日本の大学に入ってから使う機会が増え、現在は日本語と英語使用は半々となると報告している。R3NP は習得言語と言語能力の自己評価について、第 1 言語はネパール語 (5 レベル) で、第 2 言語が英語 (3 レベル)、第 3 言語は日本語 (話す・聞く: 3 レベル、書く・読む: 2 レベル) と報告している。

## (2) R3NP の日本語使用意識と言語管理 (主観的なレベルの語りから)

### ① R3NP の共時的語りに見られる日本語使用意識

R3NP は大学院のゼミ発表の話題でゼミでの自身の日本語使用を留意していることについて語っている。R3NP は例 4 で、ゼミ発表のために分担された文献の日本語の漢字が難しく全部読めなかったために発表がうまく出来なかったことを振り返り、ゼミでの自身の日本語使用を否定的に評価している。また、その問題を解決するために R3NP はネイティブの日本語に近づけようとすることを意識するよりは、英語で論文を書く作業を増やすなど日本語の代わりに英語を使うことを優先する調整に変えている。R3NP は、日本語は日常会話さえできればよく、大事なのは言葉よりも中身のほうで、中身をもっと付けていくという方向に意識が変わっていることを語っている。

#### 〈例 4 R3NP の共時的語りに見られる日本語使用意識の例〉

R3NP: ゼミで発表の内容をみんなで分担するんですけど、私がこの章が発表したときは、やーもーほんとに(笑)うん、なんか、ちょっともう人生で一番つらい時期とか、恥ずかしいとかあったんですけど。漢字が難しいので、今でも本が全部読めません。でも、ネイティブの日本語にしたい意識は全くないし、今はもう論文書いて、もちょっとなんか英語に、日本語よりも(後略)。

R3NP: 外国語、あんまり、そんなに私これ以上は私のレベルはないということ考えたんで、普通の日常の会話はちゃんとできれば、中身、なんか言葉が外見、いろんなものが、中身をもっと付けていこうということをよ

く考えていて、表すのはどうやってもできるかもしれないけど、まずは自分で中身を作ろうということが、言葉よりも(後略)。

② R3NPの通時的語りに見られる言語管理

R3NPのこのような現在の日本語使用に対する意識は、R3NPが大学に入る時から思いはじめたことのようにみえるが、例5はそれに関する語りである。R3NPは大学に入ってから日本語が難しくなり、自分の日本語ではもうダメだと思いはじめたと語っている。またERのネイティブのように話したいという意識はあったかの質問に対しては、「最初は思っても、あのできないということがわかってて、まあこれはもう無理ですということが思ってた、」と話しており、今はそういう意識はないことを示唆している。さらにR3NPはそう思うようになったきっかけとして、アルバイト先での知り合いとのやり取りをあげている。R3NPはアルバイト先の日本人の知り合いに日本語の悩みを相談したときに「顔を見れば外国人であることが分かるので、無理して頑張らなくてもいいよ」と言われ、「もう日本人からもそう言われて、いや、もういい、俺はもうこれでいいんだという」と思いはじめ、日本語の習得のためにそれほど頑張らなくてもいいという意識が一層強まっていたことを報告している。

〈例5 R3NPの通時的語りに見られる言語管理の例〉

ER: 大学で使う、大学院で使う日本語はどうですか。

R3NP: 大学に行って、もうちょっと勉強して、俺はもう、日本語ではダメだねということが思ってた、入ってから。

ER: 日本語ネイティブのようにしゃべりたい意識は。

R3NP: 全くなかった。

R3NP: なんか、最初は思っても、あのできないということがわかってて、まあこれはもう無理ですということが思ってた、あ、それもきっかけがあるんですよ。お前はね、いつでも頑張ろうという精神をだしたら、バイト先の店長が、お前ね、お前顔でわかるから、いいよ、お前全然そんなに頑張らなくて、お前の言葉伝わればいいよ。

ER: えーそれで、何と言ったんですか。

R3NP: 仲いい店長だったから、お前はね、これでいいよ、これ以上はいら  
ない、か、顔見ればもうわかるから、なんであれしようと、もう日本人か  
らもうそう言われて、いや、もういい、俺はもうこれでいいんだという。

### (3) R3NP の接触場面向かう言語管理からみる日本語習得意識

以上の R3NP の主観的なレベルの語りからは、R3NP の接触場面向かう言語管理が、滞在期間が長くなるにつれ、日本人の日本語の規範に近づきたい意識は薄くなっていること、言葉より中身を、また自分なりの日本語でいいという方向に変わっていることがうかがえる。また、R3NP は接触場面での日本語使用における問題が生じたときは、日本語の代わり英語を積極的に使用したり、あるいは例 6 の語りで分かるように自分の日本語の漢字の問題を助けてくれる中国人留学生との人的ネットワークを強めるといった調整ストラテジーを積極的に使用していることが分かった。

#### 〈例 6 R3NP の接触場面向かう言語管理からみる日本語習得意識〉

R3NP: わたしやっぱり中国の方が中国人の方と仲良くしてるんで、むこ  
うはやっぱり、いろんな言葉しゃべってる時、あ、なるほどということ  
が、けっこういろいろあって、なんというかな、日本人がよりも外国人か  
らよくなんかよく日本語習ったときもあるので (後略)。

### 5.3. 言語バイオグラフィーからみた B-2 の日本語使用意識と言語管理 (R5IDN の場合)

表 6 言語環境と言語バイオグラフィーの語りの分析例

個人プロ フィール と言語環 境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インドネシア (ジャカルタ出身)、20 代、M</li> <li>・2009 年に来日し、現在大学院生</li> <li>・出身地域での使用言語: 母語のインドネシア語、英語の 2 言語中心、 両親はジャワ語話者で、地方に戻るとジャワ語を聞くこともあるが、自 分で話すことはない。</li> <li>・日本での使用言語: インドネシア語、英語、日本語の多言語使用する。</li> </ul>
---------------------------	---

<p>事実レベル</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校では英語、サンスクリット語を習う。</li> <li>・小学校4年生から英語、インドネシアの言語政策により一時期は学校で中国語も学習する。</li> <li>・高校卒業後に来日し、日本語学校と高等専門学校に通い、その後学部 の3年生に編入し、現在は大学院生。</li> <li>・日本語は日本語学校でゼロから学ぶ。</li> </ul>
<p>主観的レベル</p>	<p>【通時的語り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の時は外国語の勉強は嫌いだっただ。</li> <li>・英語もそれほど得意なほうだと思わなかった。</li> <li>・日本語はまったくゼロから習い始めた外国語で、話せるようになった時はとても嬉しかった。</li> <li>・学部に入ってから日本語の使用や習得に対する意識が変わった。</li> <li>・高専の時は周りに日本語ができることを認めてもらうために一所懸命勉強した。</li> <li>・それが出来て当たり前みたいに見られ、<u>自分を外国人として見てくれていないことに気づき、その後から日本語使用に対する意識が変わる。</u></li> </ul> <p>【共時的語り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・久しぶりに会った友達に日本語使用を指摘されるが、自身の日本語使用を肯定的に評価する。</li> <li>・前は日本語を話す前によく整理してから話していたが、<u>最近</u>はあまり考えず、<u>浮かんだことをそのまま話す。</u></li> <li>・最近自分らしさをもっと出すように言葉遣いを管理している。</li> <li>・自分で選んだ言葉で話していると、日本語が下手になったと評価される。</li> <li>・最近インドネシアのあいづちをそのまま気にせず、日本語に訳して使うようになった。</li> </ul>
<p>テキスト・レベル</p>	<p>【自発的語り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本に来てからの日本語の習得について</li> <li>・日本人の自分に対する見方について</li> <li>・日本語使用に対する意識が変わったことについて</li> </ul> <p>【質問による語り】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語使用で困ったことについて</li> <li>・日本語習得の目標について</li> </ul>

(1) R5IDN のプロフィールと個人の言語環境 (事実レベル)

R5IDN はインドネシアのジャカルタ出身で、両親がジャワ語を話す家庭環境で育った20代の男性である。出身地域での使用言語は、インドネシア語と英語で、小学校4年生から英語と標準インドネシア語を習得し、またインドネシア政府の言語政策により一時期は中学校で中国語も学習している。高校卒業後に来日し、日本語は日本語学校でゼロから学び、2年間高等専門学校に通った後、4年生大学の学部生として編入する。現在は修士課程に在籍しており、日本滞在歴は調査時で7年目になるという。出身地域ですでに多言語使用者であったR5IDNは、自身の言語習得と言語能力について、インドネシア語(5レベル)、英語(4レベル)、日本語(話す・聞く: 5レベル、書く・読む: 3レベル)と自己評価している。

(2) R5IDN の日本語使用意識と言語管理 (主観的なレベルの語りから)

① R5IDN の共時的語りに見られる日本語使用意識

R5IDN は例7において、最近久しぶりに会った日本人の友達に日本語使用を指摘されたことを話している。R5IDN はある話題でインドネシアのことわざをそのまま日本語に訳して使い、それを会話の相手である日本人の友達に指摘される。R5IDN はそのときの自身の日本語使用を留意するものの、否定的には評価せず、むしろインドネシアのことわざをそのまま日本語に訳して使うことで会話を弾ませようとしていたと話している。このことからR5IDN はことわざの使用を会話進行のための戦略として使用していたことがうかがえる。また前は日本語ができることをほめてもらうためによく日本人の話し方をまねしたりしていたが、最近では自分のことを普通に外国人として見てほしく、日本語も自分らしい日本語の使い方でいいと思うようになったと日本語の使用に対する意識が変わったことを話している。

〈例7 R5IDN の共時的語りに見られる日本語使用意識の例〉

R5IDN: 自分結構インドネシアで使われてることわざそのまま日本語訳しました。インドネシアではよく物を盗む人は「手が長い」っていうん

ですけど、そういうとこ使うと、え、なに言ってんの？ って言われたんですけど。逆にこっちから教えるっていう感じが楽しくて。それで話題になって。話題というかトピックになって。それで話してやるという感じが結構使ってますね。

## ② R5IDN の通時的語りからの言語管理

R5IDN が例7の語りのような言語管理と日本語使用意識を持つようになったのは、次の例8の通時的語りからその要因をさぐることができる。R5IDN は例8で学部に入った時から自分の出し方や日本語使用意識が変わったことを語っている。自分のことは出さず、とにかく日本人のように振る舞っていたら、いつのまにか周りが自分のことを外国人と見てくれなくなり、何かを間違うとついダメ出しが来るようになったことを話している。また R5IDN は例9のように自分のことを他の外国人のように見てくれない周りがだんだん不公平に思えたと話している。さらに、R5IDN は例10で語っているようにちょうどその頃、インドネシア人に会い、自分がインドネシア人らしくないことに気付いたことがきっかけで、自分らしさをもっと出す方向に意識を変えていたこと、そのため自身の日本語の使用が日本語規範から逸脱していることを知りながらも、わざわざインドネシアのことわざを使うなど自分の言葉遣いを管理していたことを報告している。

### 〈例8 R5IDN の通時的語りに見られる言語管理の例〉

ER: それはいつ頃からまた思うようになったんですか？

R5IDN: 大学かな。

ER: 何かきっかけはあるんですか？

R5IDN: きっかけはどっちかっていうと、話はボンって飛んだんですけど、研究室だったりとかバイト先だったり結構日本人とか中国人とか、特に日本人かな、って思われて。日本語が完璧とか、漢字が全部わかるとか、態度が日本人の態度してるとか、日本の文化全部わかると思われちゃってると困りますね。

R5IDN: なぜかって、例えば、このときインドネシア人大丈夫なのに日本人はダメとかあるじゃないですか。あんまり、今来ないんですけど、例えばなんだろうな、この時はすいませんって言うでしょみたいなところっていうところは、え、大丈夫でしょ、っていうのもあるんですけど。そのときは普通の留学生よりはすっごい怒られます。

〈例 9 R5IDN の通時的語りに見られる言語管理の例〉

ER: 日本人に見られる？

R5IDN: 発表する時もそんな感じだし、なんでそのときわからないの、とか。だって日本語だもん、わかんないもんとか、わからない所、どんだけ完璧でも日本人じゃないからわからないですよ。あと、本読んでもどう頑張っても日本人じゃないし、中国人じゃないし、漢字も初めて見たし、わからないはわからないんですよ。ただ、日本人だと思われてすっごい困ります。

〈例 10 R5IDN の通時的語りに見られる言語管理の例〉

R5IDN: 前はなんかこう自分のなんかどどん捨てて、日本人の考え方だけしてたんですけど、高専のときですね。こっちきたら、本物、本物というか、本物のインドネシア人が全く日本の事がわからない、日本の意見がわからないインドネシア人に会うと考え方違うなと思って。今まで自分が日本人と思われた所は見た目だけじゃなくて、やっぱ意見の出し方とかは、出してる意見が全部日本人だからそう思われたかもしれないんだなと気づいて、ちょっとインドネシア人っぽくというか外国人っぽくしなきゃと(後略)。

### (3) R5IDN の接触場面に向かう管理と日本語習得意識

上記の主観的なレベルの語りからは R5IDN は来日直後と現在とで日本語使用に対する規範意識が変わっていることがうかがえる。つまり、R5IDN の日本語の使用意識は、次の例 11 で「前は浮かんだやつをちょっと整理して出すんですけど、最近それ面倒くさくて。あとそれだすとどん

どん日本人とかでなんかインドネシア人ばくないって言われると、いろいろ考えて結局(後略)」と語っているように、ある時点を境に弱まり、逆に自分らしい日本語をより重視する方向に変わっていたと考えられる。また例12で語っているように「丁寧語か。そこは俺は気にしないわ、みたいな感じですね。そこの所で評価すると困るから」と言葉さえ通じれば、スピーチ・スタイルのような言語形式は多少問題があっても気にしないと、日本語の習得意識も習得目標を限定する方向に変わっていることがうかがえる。

〈例11 R51DNの日本語の規範意識〉

R51DN: 前は浮かんだやつをちょっと整理して出すんですけど、最近それ面倒くさくて。あとそれだとどんどん日本人とかでなんかインドネシア人ばくないって言われると、いろいろ考えて結局。

例えば、もしかして日本語だと不自然かもしれないけれども、でもまあ自分は自分だからあれまんまで日本語使いたって思ってる。

〈例12 R51DNの日本語習得意識の語り〉

R51DN: (日本人に日本語を指摘され) 最初なんかこう、どこか下手なの？普通に今喋ってるじゃんか思うんですけど、でも最近というか、一年たって、ああそこなんだ、丁寧語か。そこは俺は気にしないわ、みたいな感じですね。そこの所で評価すると困るから、別に俺は気にしてないですと。

## 6. 言語使用グループの日本語使用意識と滞在期間との関係

以上、本研究では、外国人移住者の現在の言語環境の実態をとらえながら、日本語使用や習得に対しては現在どのような意識を持っているかを、またそれは言語環境による言語習慣が異なるグループでどのような異なる特徴を生み出しているかを、言語バイオグラフィー・インタビューの当事者の語りを基に分析・考察した。その結果、言語環境が異なる言語使用グループでは日本語使用意識や言語管理も異なっていることが明らかになっ

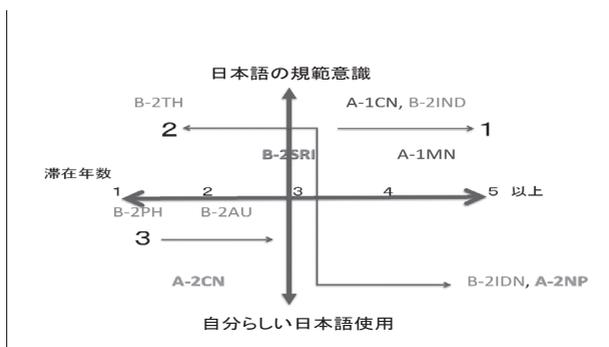
た。具体的には、出身地域では母語の単言語を主とするが、日本では母語と日本語の使用を主とする A-1 に属する調査協力者の場合は、日本語の使用において日本人の日本語に近づきたいという意識が強く、また日本語の習得においても自分らしい日本語使用を否定的に評価するなど、日本語の習得に対しても目標意識が高いことが分かった。またそれは滞在初期から現在においても変わらず、規範意識を維持する傾向にあることが分かった。

一方、出身地域では母語の単言語使用であるが、日本では母語と日本語に加え、英語などのもう一つの外国語を使用している多言語使用グループ A-2 に属する調査協力者の場合は、最初は、日本語使用や習得に対し強い規範意識を持つものの、漢字習得の問題が自身にとっては解決できない問題であることに気づき、日本語に代わる言語手段や調整ストラテジーを見つけることで習得問題を解決しようとする方向へと意識が変わっている。言い換えると、A-2 は A-1 に比べ、日本語使用における規範意識が比較的弱く、また自分らしい日本語の使用に対しては意識が比較的高いといえよう。また出身地域でも多言語使用者で日本でも多言語を主として使用する B-2 グループに属する調査協力者の場合も個人差はあるものの、滞在期間が長くなるにつれ、日本語の規範に対する志向が比較的弱く、縮小していることが分かった。

以上の本調査における言語使用グループの滞在期間と日本語使用意識の動きとの関係を全体で表してみると、次の図 2 のような傾向が見られることが分かった。

日本の外国人移住者の日本語の規範意識と自分らしい日本語の使用意識は、滞在年数によって変化する場合もあるが、変化せず、維持されている場合もある。またそのときの意識の変化の有無は言語使用グループと関係しているが、図 2 の A-1CN と B-2IND のように一部の使用者においては言語使用グループに関係なく、現れる場合もある。また B-2 の言語使用グループに属する外国人移住者で滞在期間が短い人の中には、日本語使用意識に対し、最初から自分らしさの日本語使用を意識している人たちもいる

図2 言語使用グループの滞在期間と日本語使用意識の動きとの関係<sup>4)</sup>



が、そういう人たちの場合、来日前の言語環境をみると、R6PH や R7AU のように移住前の社会ですでに移住者として母語以外の外国語使用や習得を経験している人で、日本において見られる言語使用意識は以前の移住社会での通時的な管理による結果である可能性が、彼らの複数の主観的レベルの語りから確認されている。また A-2 の言語使用グループに属する外国人移住者の中にも最初から自分らしい日本語使用の意識が高い人がいたが、その場合は R4CN のように日本での滞在を 2 年未満と短く予定している人で、また出身地域に戻ってからも日本語を使う機会があまりない移住者であることが分かった。

以上のように外国人移住者の日本語使用に対する意識は、滞在期間と一定の関係にありながらもその現れ方は一様ではなく、個人の移住する前の言語環境や言語管理の蓄積、移住のタイプなどによって異なることが分かった。

## 7. おわりに

本稿では、外国人移住者の出身地域と移住社会での言語環境の変化に伴う使用の変化の方向性を、言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析から明らかにすることを試みた。従来の外国人移住者の研究は、言語意識を共時的な視点でとらえることが多く、通時的な視点からの分析が

少なかった。出身地域の言語環境と現在の言語環境という移動を時間軸とする通時的な分析が可能になり、それにより言語意識の変容をとらえることが可能になる。また時間軸の通時的な視点からみていくと、日本語使用意識の変容の方向性を読み取るだけでなく、日本語の習得に向かう意識の方向性も読み取ることができる。

一方、日本の外国人移住者は言語使用グループごとに異なる日本語使用意識と当事者評価がみられることが確認できた。またそれは日本語使用を含む外国人移住者の言語習慣が当事者の通時的管理による結果であるという仮説を一部検証できたことを意味する。と同時に外国人移住者の日本語の習得問題の手掛かりとして、言語習慣や言語バイオグラフィーの通時的考察が重要であることも示唆している。これらの示唆については今後より多くの外国人移住者の言語バイオグラフィーを調査することで考察を深めることができるだろう。

#### 注

- 1) 国連 2013 年の調査によると、世界における国際人口移動者数は年々増加し、2013 年では 2.3 億人を超え、世界人口の 3.2% を占めるという。
- 2) 本稿では移動する人々という意味で「外国人移住者」という用語を使用している。
- 3) 法務省の統計によると日本に居住する外国人数は、2015 年 12 月現在で、212 万 1831 人となり、総人口の約 1.6% を占めている。
- 4) 図 2 における記号は言語使用グループと出身地域のみで表している。例えば、B-2PH は B-2 の言語使用グループに属するフィリピン出身の調査協力者のことを指す。

#### 参考文献

- 高民定・村岡英裕 (2015) 「日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告」村岡英裕編『接触場面における相互行為の蓄積と評価：接触場面の言語管理研究 vol. 12』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 248 集、千葉大学大学院人文社会科学研究所、125-140 頁
- 今千春 (2012) 「韓国人居住者の接触場面向かう言語管理：言語バイオグラフィーからの記述の試み」村岡英裕編『外来性に関わる通時性と共時性：接触場面の言語管理研究 vol. 10』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 292 集、千葉大学大学院人文社会科学研究所、49-67 頁

- ネウストプニー、J. V. (1995) 「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7号、67-82頁
- ネウストプニー、J. V. (1997) 「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」『多言語・多文化コミュニティのための言語管理: 差異を生きる個人とコミュニティ』国立国語研究所、21-38頁
- 野山広 (2013) 「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究」『国語研プロジェクトレビュー』4巻、2号、100-109頁
- 村岡英裕 (2010) 「接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて」村岡英裕編『接触場面の変容と言語管理: 接触場面の言語管理研究 vol. 8』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書228集(47-59頁)千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 村岡英裕 (2016) 「インタビュー調査の文脈から見た日本の移動する人々の言語使用に対する評価について」公開研究会『移動する人びとの言語使用と言語管理』配布資料(千葉大学、2016年1月25日)
- Denzin, N. (1989) *Interpretive Biography*. Newbury Park, London, New Delhi: Sage Publications.
- Fan, S. K. (2015) Accustomed language management in contact situations between Cantonese speaking Hong Kong employers and their Filipino domestic helpers: A focus on norm selection. *Slovo a slovesnost*, 76, pp. 83-106.
- Jernudd, B. H. and Neustupný, J. V. (1987) Language planning: For Whom? In Laforge, L. (ed.) *Proceedings of the International colloquium on Language Planning*. May 25-29, 1986, Ottawa. Les Presses de l'Université Laval, pp. 69-84.
- Muraoka H., Fan S. K. & Ko M. (2013) An ethnographic analysis of evaluation diversity in language management. *The 3rd Language Management Symposium Prague*, Charles University. (2013.9.14-15).
- Nekvapil, J. (2003) Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language*, 162, pp. 63-83.
- Neustupný, J. V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and J. Kwan-Terry (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution* (pp. 50-69). Singapore: Academic Press.